

毛沢東時代における労働者の婚姻

—洛陽の工場労働者の研究—

方莉琳(FANG LiLin, ふあん・りりん)*

婚姻問題は人間社会の永遠のテーマである。建国後の中国における婚姻・家庭問題に関する研究は数多く、概説的な研究のほかに、大型の婚姻・家庭社会調査や、フィールド研究もなされている。ただし、大型の社会調査は主に 1978 年以降の家庭の変化に関する調査で、フィールド調査は建国後の新しい婚姻制度の影響に焦点をあてているものの、大部分は農村の婚姻・家庭問題の研究である。また、同じ時期の異なる集団同士は異なる特徴が現われ得る。このため報告者は、毛沢東時代における農民集団以外の重要な集団である労働者集団の婚姻を明らかにすることをめざす。しかし、婚姻は、選択の基礎の上に成り立つものである。いかに婚姻選択が行われ、労働者の婚姻生活状況を左右したのか。本研究では、労働者の婚姻選択から、毛沢東時代の労働者の婚姻問題を読み解くことを試みる。

新中国建国後の中国工業発展の分布と先行研究における婚姻問題に関するフィールド調査地域の分布（主に東部、東南、西南部に集中）を考慮して、本研究では「一五」計画期の重点工業建設都市であった河南省の洛陽市を研究調査対象とする。洛陽工場労働者へのインタビュー調査を通して、毛沢東時代の婚姻問題にアプローチする。本調査では、32 人名についてインタビュー調査を行った。その内訳は、地方転業幹部が 5 名、軍隊転業幹部が 2 名、技術幹部が 3 名、技術労働者が 3 名、工場医が 3 名、労働者家族が 5 名、現場労働者が 13 名で、男性が 18 名、女性が 14 名である。

一、伝統的な配偶者選択基準の衰退

婚姻の成立はまず配偶者選択の上に成り立っている。マルクスは「結婚とは既婚者のふるまいからわかるものではなく、既婚者のふるまい自体が結婚の本質に従っているのである」¹と言った。ここからわかるように、配偶者選択は個人の主観的意識による独断によってなされるものではない。異なる社会背景のもとでは、配偶者選択基準も異なりなのであり、同じ時代背景のもとでも、職業が異なれば配偶者決定の基準もまた異なるのである。中国の伝統的配偶者決定とは、つまるところ「門当戸対（家柄のつり合い）」であり、男女双方の家庭の財力や家柄のつり合いが重視され、なおかつ婚姻交渉の過程において最も発言力と決定権を持つのは、男女双方の父母であり、本人ではない。「父母の望む娘を娶り…結婚後は、ともに愛しともに敬い助け合い、仲睦まじく手を取り合い、労働に励み、幸せな家庭を作る」²。父母とは自身の経験の教訓を子供に伝え、家長の権威を子供に伝える。伝統的結婚の中にも美しい縁もないとは言えないものの、多くの場合は個人の幸福が家族の利益の犠牲となっている。

新中国成立後、「新婚姻法」の発布に伴い、家族の利益を本とする婚姻観念は封建社会制度重要な要素と定義された。毛沢東は、『湖南農民考察報告』の中で、中国の男性は三つの体系的な権力支配を受けてきたと指摘した。すなわち、封建主義的な政治権力、家族権力、宗教的

* 南京大学社会学院社会学修士課程 (yilin6630@gmail.com)。

¹ 張志永『婚姻制度の伝統から現代への移行』中央社会科学出版社、2006 年、169 頁。

² 張志永『婚姻制度の伝統から現代への移行』中央社会科学出版社、2006 年、170 頁。

権力である。そして、中国の女性は、これらの三種の支配のほかに、さらに封建主義的な夫の権威的支配を受けている。旧い婚姻制度には、包弁（親の独断）、脅迫、売買、幼少婚、重婚、納妾（妾を囲う）、童養嫁（嫁にする目的で養女を育てる）そして家庭における義父母や夫による嫁への虐待など、夫権を中心とした家庭内の父母や夫の妻への支配関係により生み出されたものばかりである³。だからこそ、新中国はこれら「家庭内奴隷制」を覆し、男女平等を実現し民主的で自由な社会生活を実現し、婦女と子供の正当な利益を保護しようとしたのである。

1951年の『人民日報』に掲載された「私の結婚は完全に自発的なものだ！」という文章を旗印とし、李秀蘭は伝統的包弁婚との戦いに号令をかけた。

編集者同志へ。私は太原の縫製工場の女工で、今年で19歳になりました。仕事をしながら、私と張斌同志は恋愛感情を抱きあいました。我々は恋愛期間を経て相互に理解し合い、革命の道を手を携えて進み革命夫婦になりたいと思っています。しかし、私の父は私たちの結婚を認めてくれません。私は再三父を説得しようとしたのですが、効果はありませんでした。父は1月11日の夜に私を脅し、私と張同志の仲を裂こうとし、拒むならば麻縄で私を絞め殺すと迫ってきたのです。私は本当に父が私を殺すのではないかと恐れ、嘘の答えをしました。次の日、私は自分の生命を守り、封建的家庭の連鎖から抜け出すために、家出をしました。工会の支持のもと、私と張同志は婚姻法に従って1月15日に結婚しました。我々の結婚後、父はいまだに不服で、封建思想から抜け出せずいます。彼は事実をねつ造し、張同志を侮辱し、彼が私をだましたぶらかしたのだと言うのでした。父は張同志を訴えたのです。このような状況で、私は自分の態度を表明したいのです。私の結婚は自分の意志に基づくものであり、誰かにだまされたり、たぶらかされたものではありません。私は新しい社会の女性であり、私は婚姻法を理解し、さらに新中国の女性が勝ち得るべき社会的地位のために戦うつもりです。

父は事実をねつ造すべきではありませんし、勝手に張同志を訴えるべきでもないと思います。さらに娘に張同志と離縁するように脅すべきでもありません。父がこのような包弁婚の封建思想を堅持することに対し、私は断固反対します。みなさんが私の手紙を紙面上に公にし父を教育し父の封建思想を改変させてくれることを望みます。⁴

これは新中国の青年が家族本位の配偶者選択基準に対して起こした挑戦である。ここより、伝統社会の配偶者選択基準が次第に衰微し、個人本位の新しい基準が形成され始めた。1953年の「新婚姻法」に伴い、全国規模で喧伝され、人々の経済生活水準も改善され、過去の売買婚などは減少して行き、さらに一五計画の実施に伴い大量の青年が家庭を出て、社会主義建設に参加し、父母の子供の婚姻に対する影響力も衰退していき、これとは対照的に、単位や組織、工会などが個人生活を指導するようになっていった。これより、伝統的なものとは異なる新中国の配偶者選択観が形成された。

³ 「新民主主義の婚姻制度を実行する」『人民日報』1950年4月16日号、第1版。

⁴ 李秀蘭「私の結婚は完全に自発的なものだ！」『人民日報』1951年2月13日号、第2版。

二、新たな配偶者選択基準の登場

1. 職業に貴賤有り

新中国の成立以前は、中国の経済発展は停滞しており、職業上の細かい区分は実際には存在しなかった。新中国成立以後は、中国社会の階級が明確に区分され、主に労働者、農民、幹部、知識分子、市民とに分けられた。その後の発展により、労働者階級概念が規範化し、労働と幹部はひとつの階級とされたが、内部では自身による区分が存在していた。新中国成立初期、幹部に実行されたのが配給制であることから、ほとんど何の収入もなく、幹部は経済的利益を核心とした家長としては大きな吸引力を持たず、人々の間で「海昌藍（幹部）に嫁に行くなら、交通員（給料制）に嫁に行った方がましだ」という言い草が流行った。これとは異なり、労働者は結婚市場で、人々には「香饅饅（おいしいお菓子）」に映った。

1954年、各地から洛陽の支援のために技術労働者や技師、派遣幹部、建八師などが続々と洛陽へとたどり着いた。当時は7万人しか人口のいなかった洛陽は遅れた地域であり、澗西区はいまだに一面麦畑であった。工場はまだ建設中で、来たばかりの労働者たちは臨時の宿泊所に暮らし、昼は現場で、夜は宿泊所でしばしの休息をとり、労働者の家族が呼び寄せられると、付近の農家に間借りするようになった。1955年に到り、ほとんどの農家が1戸あたり3世帯が住むようになった。これらの家族は間借りする農家の中では、普段は家事を除いては、重労働をすることはなかった。これが農民には農業の前途がないと感じさせ、工業に従事することを希望させるようになった。これらの洛陽に来て、工業建設に動員された未婚青年労働者は、こうした理由から農村の若い女性の理想の結婚相手となったのである。こうした労働者がやって来たので、洛陽の結婚市場は混乱した。

孫旗鎮からは43人の青年女性の中で軍工と結婚したのは3人（うち1人は離婚）、婚約中が1人、交渉中が5人、軍工と結婚するつもりの方が2人、合わせて11人。南村（自然村）では未婚の青年女性が12人、軍工と結婚したのが1人、交渉が成立した者が2人、交渉中が5人である。唐村の未婚青年女性は6人で、軍工と正式に交際中の者が2人（1人は離婚経験者）、交渉中が1人である。李金英も軍工と交渉した後に、自分の恋人（市民）に婚約を解消するよう要求し、岳花子は去年10月に前夫（教員）と離婚し、軍工と結婚した。孫旗鎮と南村の統計から、すでに婚約解除した、あるいはその予定の者は、13人おり、その中で、相手が初等中学生の者が3人、農民4人、幹部5人（うち2名は男性側から申し出）、労働者学生1人である。離婚（離婚後に軍工と結婚）した2人のうち、解放軍1人（早くに離婚）、教員1人（去年10月離婚）である。軍工と結婚した者5人、恋愛中の者5人、結婚にいたっていない者13人、軍工を希望している者2人、合わせて25人である。⁵

農村青年女性の中では、「一に労働者、二に幹部、三に教員、百姓に嫁ぐくらいなら死んだ方がまし」という考えが流行った。多くの婚約済みの女性が婚約の解消を望み、その後に労働者の結婚相手を探した。これら労働者がその他の職業に優越する現象は決して偶然ではなく、それは労働者階級の新中国における地位が決定的だったからであり、彼らは中国の指導階級だ

⁵ 洛陽市档案馆「工場村建設の婚姻問題に関して市委に向けた報告」1955年6月14日。

ったのである。労働者階級の政治上の指導的地位により、さらに一五計画の実施により、国家工業化建設は労働者に対する強烈な依存、労働者の社会全体における地位が新中国では相当に高まっていたのである。

工場建設初期は、幹部は困難に面していて、…。幹部が労働者に言うには、「張さん、李さん、私を必要としてください、私が話に行くのを手伝ってくださいね」。これら労働者は…⁶

ここからわかるように、労働者の地位の優越性は、政治的地位は体現しているだけでなく、経済上の待遇の体現でもある。17級の県級幹部の給料は8級労働者と同じで、なおかつ文学大革命以前は、労働者にはボーナスもあったが、当時の行政幹部にはなかった。しかし、同じ労働者と言えども、内部ではさらに差があり、技術労働者は往々にしてさらに優位にあった。

呉さんは小学校教師です。彼女は結婚していました。政治上の原因で夫と離婚しました。現在、彼女は結婚相手を探しています。彼女の条件は、政治的に潔白で、進歩的で、人民の事業に忠実でありさえすればよくて、文化水準や職業は二の次だそうです。映画を観に行ったときに偶然知り合ったのが李さん。李さんを技師だと思っていたのですが、実は李さんは炊事係だとわかり、そそくさと離れて、後で李さんに手紙を書きました。「私たちはお友達ではありません。決して誤解しないでくださいね……私はただお願いしたいのです。他の人には私たちが知り合いたとは言わないでくださいね。」⁷

この話から、炊事係と技師は同じ労働者であると言えども、結婚選択においては、その地位が全く違うということである。技師以外では、労働者階級では、運転手が歓迎された。職種が違うので、保有する資源もまた異なる。

労働者の中で、運送会社の運転手と鉱山工場の運転手、医者が必ずまず選ばれる。運転手の給料は同じだが、運転で遠くへへ行けるので、地元では買えない物を買うことができ、ちょっと待っていれば、素敵な物を持って帰って来てくれる。⁸

労働者階級の地位と資源は、労働者に栄華をもたらし、労働者に嫁ぐことが、女性の理想となった。しかし、大躍進運動の後、工業も規模が拡大され、労働者が急増し、洛陽市は「三年大発展」を経験し、労働者の人数は、1957年に78,301人、1961年には127,174に急増し、国有会社の労働者は82%増加した。工業の成長スピードは緩和したため矛盾が生じ、工業と農業、都市と農村の関係を調整し、国民経済の難局を乗り越えるために、中共中央と国務院は1961年6月16日に「城鎮人口の減少および城鎮食料消費の圧縮に関する9つの方法」を制定した。6月28日、中共中央はまた「労働者を削減する問題に関する通知」を提出し、この「通知」において、三年以内に必ず1960年末の城鎮人口を2,000万人以上減少させることを要求

⁶ Z氏談。

⁷ 「彼は技師じゃなかった」『新中国婦女』1954年11号。

⁸ M氏談。

し、その中で、1961年には少なくとも1,000万人削減し、1962年には少なくとも800万人、1963年上半期には残余を削減することを要求した。削減の主要な対象は、1958年以来農村よりやって来た新しい労働者、1957年末以前に農村よりやって来て、自発的に農業生産に参加する者、およびその他の方面からやって来て農業生産に自発的に従事する労働者である。労働者の急激な増加のために、都市圧力は大きな問題になり、工場は労働者を各自の郷里へと返そうとし始め、農業生産に参加させた。1961年9月末、洛陽市第一次削減任務が基本的に終了し、労働者55,414人が削減された。この削減で、国営企業内部の労働者削減は20.5%、地方工業は30%、基本建設単位は43%削減し、文教関係は12.4%削減された⁹。この労働者の「下放」は、労働者の結婚市場における地位を低下させた。多くの者が労働者に嫁いだり、労働者を娶った後になって、労働者が下放され居住地が分かれてしまい生活に矛盾が生じることを心配した。

同時に、幹部たちの身分も人知れずに変化していた。労働者の給料は相当高かったが、幹部たちの特殊性も次第に現れ始めた。

指導上の特殊性は、主に食、住、旅行、救済、人事などの方面に現れる。労働者が食券を持たず食料を買えなくても、所長は銭も払わず、ご馳走を食べた。風邪が流行した時も、労働者が長期間病院で診てもらえないのに、張所長の子供が病気になると、もともと配給所の医者に見せて治療できるが、張所長は衛生所の医者に家に来てもらって、自分の息子を診させようとした。人事のことになると、指導者はまず自分の親戚を雇用し、労資所の所長の弟のひとは農村では何もせず、工場に来てからは清掃労働者になり、多くの労働者の家族の要求に応じていない……¹⁰

これらの変化はある程度洛陽の結婚市場に変化をもたらした。工場建設期には労働者が第一だったのが、幹部集団が結婚市場における「第一候補」になった。

その頃、工場の中では労働者を結婚相手を見つけることができれば、それで充分よくて、普通はなかなか見つけられない。給料はまだよかったけれど、とりわけ大工場はそうだったが、誰が望んで労働者のところに行くだろうか。普通は幹部を探したよ。もしも自分自身の条件や家庭の条件が特に良いのでなければね。私も当時は大工場がいいと思ったし、大工場でなければ、別にいいと思った。…、鉍山工場、当時はみんな大工場で、その時は仕事は楽で保障もあった。そんな感じ。普通は小さな工場じゃ、だめだね。¹¹

上記の通り、配偶者選択において、1958年以降、幹部が労働者の優位に立ち始め、なおかつ格差が今でも続いている。労働者も同様で、一般の国営工場の労働者は集団工場よりも優位であった。これは、国営工場の労働者の給料が平均して集団工場よりもいくらか高かったからである。なおかつ、社会経済的地位も、国営工場の方が高く、安定も高かった。1961年の削減で、国営企業内部の労働者削減は20.5%、地方工業は30%、基本建設単位は43%削減し、

⁹ 洛陽市総工会『洛陽労働者運動史』1992年、289-292頁。

¹⁰ 洛陽市档案馆「洛陽市労働者代表大会において討論された企業内の人民間矛盾問題状況に関する報告」1957年5月8日。

¹¹ G氏談（本人は工場医師で、夫は工場技術労働者）。

文教関係は 12.4%削減された¹²。国营工場と集団工場の区別は、概ね「大工場と小工場」の区別と重なっている。報告者が洛陽市の档案馆で見つけた 1966 年から 1975 年までの洛陽市の某工場区の一ヶ月ごとの結婚登録統計表を整理したところ、以下のクロス表のようになり、大工場の男性労働者 46.4%が大工場の女性労働者と結婚し、16.5%の大工場の労働者が小工場の女性労働者と結婚し、24.7%が農民と結婚している。異なる職業の男性は、配偶者の職業の選択に対して、著しい差がある。

夫婦の職業のクロス表

		妻の職業				合計	
		農民	小工場労働者	大工場労働者	その他		
男方職業	農民	人数	1	2	3	0	6
		夫の職業中の割合 %	16.7%	33.3%	50.0%	.0%	100.0%
小工場労働者		人数	8	11	9	6	34
		夫の職業中の割合 %	23.5%	32.4%	26.5%	17.6%	100.0%
大工場労働者		人数	99	66	186	50	401
		夫の職業中の割合 %	24.7%	16.5%	46.4%	12.5%	100.0%
その他		人数	3	3	9	11	26
		夫の職業中の割合 %	11.5%	11.5%	34.6%	42.3%	100.0%
合計		人数	111	82	207	67	467
		夫の職業中の割合 %	23.8%	17.6%	44.3%	14.3%	100.0%

(Sig=0.001<0.005)

2. 地域に差別有り

洛陽へやって来た人々は全国各地から来ていたが、ソ連からも専門家が来ていた。洛陽鉞山機械工場を例にとると、最初の工場建設時には上海から技術労働者がやって来て、工場幹部の多くは豫南や豫北から来た転業幹部であり、工場労働者は撫順、瀋陽、大連、太原などから集まった。54年、58年そして70年に洛陽の工場は再度労働者の大募集をかけ、これらの募集では、多くの労働者が豫南や豫東、および洛陽周辺農村からやって来た。これらの各地から集まった人々はともに暮らし、思想や教養、技術水準、風俗習慣、個人的趣味には相違が尽きなかった。大都市出身者は、農村出身者を見下し、技術者は管理部門を見下し、南方出身者は米を好み、北方出身者は麺を好み、上海出身者は河南省の方言を好まず、河南省出身者は「阿拉」(上海方言の一人称)のような上海方言を聞くのをきらった¹³。このような大きな相違も結婚選択に影響を与えた。このような現象は上海出身者に顕著であった。上海出身労働者の中には、「上海は大都市であり、洛陽は三等都市に過ぎない」という意識があった。また国家が上海出身の労働者に特殊な待遇を与えたので、上海勢の優越感はさらに後押しされた。上海から洛陽の工業建設のために来た労働者は上海と同じ水準の給与を与えられていたのである。下表は、上海から来た労働者と洛陽出身の労働者の給料の対照表である。

級数	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級
上海(元)	42.4	49.4	57.5	67	77.8	90.6	105.4	123
洛陽(元)	32.5	38.3	45.1	53.1	62.6	73.7	86.9	102.4

¹² 洛陽市総工会 『洛陽労働者運動史』 1992年、289-292頁。

¹³ 洛陽市総工会 『洛陽労働者運動史』 1992年、207頁。

表より、上海から来た労働者の1級労働者の給料は洛陽出身の2級労働者よりも高い。経済上の優越性は、彼らを人々の羨望の的にさせ、同時に彼らは優越感を持つようになった。結婚選択の場面でも、このことは現れており、

一上海人として、絶対に現地の人を娶ろうとは思いませんでした。何ととっても、当時は文化の差が大きかったので。現地の農民は、服装も、生活も言葉も、笑ってしまうほどで、どうして結婚なんてできますか。その頃、彼女たちのズボン、2尺でした。この辺の水質は良くなく、この辺の人は南方人と違って、歯がみんな黄色かったのです。文化の面でも格差は大きかったです。誰かに紹介されても、私は応じませんでした。言葉の面でも、みんな方言をしゃべるのです。今では洛陽も方言がなくなってきて、標準語に近い言葉を使っています。でも、以前は地元の方言をしゃべっていて、我々にはまるで漫才のように聞こえて、なかなか何を言っているのかわかりませんでした。¹⁴

上海出者の固有の優越感は、他の地域から来た労働者と自分たちとを差異化させた。「当時、上海人同士では上海弁をしゃべっていたので、私たちには何を言っているのかわかりませんでした。」上海出身者のこうした「傲慢と偏見」のために、上海出身者労働者の婚姻問題は組織における特殊な問題にさえなった。工場建設初期には、上海の技術労働者に著しく依存していたので、当時は既婚者は、もし家族が洛陽にいないなら、そして洛陽に来ることを希望しているなら、申請さえすれば組織が解決してくれた。未婚の上海出身青年労働者は、他の労働者のような婚姻問題の解決方法以外に、上海出身者として、特別な待遇を受け、組織内で上海出身者同士の見合いが行われた。

あの時、彼等（組織）はただ我々を安心させてここに留まらせることだけを望んでいた。申請すれば、必ず配偶者を転職させてこちらへ寄こしてくれた。また、鄭州に行くと女の子をこっちに呼んだりもしてくれた。鄭州にはいくつかの棉紡績工場があって、その女工には上海から来た人が多かった。その中の未婚の女性を呼んで、大きなバスで、一回50人ぐらい、こっちに来てもらってお見合いする。気に入る人がいれば、連絡をとる。もし成功すれば、すぐこっちに転勤させてくれる。¹⁵

このほか、上海出身労働者の繊細さと東北出身労働者の粗雑さは好対照をなしていた。ごた混ぜ状態のため、お互いに対比をし、東北出身労働者は、亭主関白と見なされ、結婚選択の上では、東北出身者も二の次とされた。工場建設初期に、労働者の配偶者選択は、明らかな出身地域による差異があり、一般に上海出身者は上海出身者との結婚を望み、それが叶わないなら、江蘇省や浙江省などの人を望んだ。東北出身者は東北出身者を望んだ。その後、工場が発展すると、各地出身の労働者の中で徐々に融和が図られ、このような出身地域差は少なくなっていた。次の世代になると、このような傾向はすでに弱まっていた。

¹⁴ H氏談。

¹⁵ H氏談。

文化交流や相互交流を通じて、次世代では交わるようになってきた。なぜなら、子供は幼稚園でほかの子と一緒にいるし、小学校に入っても一緒。河南弁、洛陽弁をしゃべらないとだめだから、家に帰っても洛陽弁をしゃべって、上海語をしゃべらない。

しかし、統計から見ると、このような区別が弱まっているとはいえ、存在し続けている。下表は、1966年から1975年までの洛陽市某区の月ごとの夫婦双方の本籍地の状況であり、ここから男女双方ともある相関があることがわかる。

夫婦の本籍地のクロス表*

		妻の本籍地			
		河南	河南以外	江蘇、浙江、上海	合計
夫の本籍地 河南	人数	265	23	3	291
	夫の本籍地中の割合 %	91.1%	7.9%	1.0%	100.0%
河南以外（江蘇省、浙江省、上海を除く）	人数	52	50	16	118
	夫の本籍地中の割合 %	44.1%	42.4%	13.6%	100.0%
江蘇省、浙江省、上海市	人数	18	11	29	58
	夫の本籍地中の割合 %	31.0%	19.0%	50.0%	100.0%
合計	人数	335	84	48	467
	夫の本籍地中の割合 %	71.7%	18.0%	10.3%	100.0%

(Sig=0.000<0.005)

このような都市間の差異に加え、婚姻選択上で非常に重要な点は、都市と農村の差別である。当時、棉紡績工場の一部の女性労働者の結婚相手の条件は「二高二不要」であった。「高い地位、高い給料、顔が悪いのは不要、都市出身者でなければ不要」。というものである。このような結婚観のため、当時棉紡績工場には十数人の30代の未婚女性労働者が結婚相手を探し続けていた。ある女性労働者の結婚条件は、都市の基準にあてはまるものであった。

タイヤ工場の女性労働者のうち5人は、現役軍人の婚約者で、お互いに農村へ戻されるのを怖れていて、両者の関係はしっかりしたものではない。心の中では、復員を待っているが、もし故郷に帰されるようなら恋愛関係は解消する気である。ある男性が女性に仕事を探してあげる条件は、仕事が見つからなければ離婚するというものであった。¹⁶

このような顕著な都鄙差別をもたらす要因は、当時の厳格な都市農村戸籍制度である。1955年「市政食料定量配給暫定実施法」の実施は、経済上の区分を都市と農村間にもたらし、1958年の「中華人民共和国戸籍管理条例」の公布、および1959年の「農村人口の都市への流入を厳格に制限する」という通知が出て、都市農村間の格差は決定的なものとなった。戸籍は食料配給の教育医療などの福利システムの分配料を左右するものとして、人々の生活の質に決定的な影響を与えた。労働者は婚姻選択において戸籍に極めて敏感になったのである。

¹⁶ 洛陽市档案馆「現在の結婚家庭分野に存在する問題に関する報告」1965年2月20日。

3. 政治が軽視される

張志永『婚姻制度の伝統から現代への移行』の中で、かつて建国初期の中国の婚姻と特徴は「政治宣伝や婚姻法貫徹などの教育の影響下で、人々は思想を追求することをひろく誉とするようになった。配偶者選択において、より多くの人々が婚姻の自由の権利を得て、社交の条件の限界もあり、人々は相手の政治条件や外面的な要素を重視し、物質的な面への要求は弱くなることが見られるようになった」¹⁷と結論付けている。新中国成立後は確かに張志永が言うように、政治条件を最優先される結婚恋愛観が強く唱導された。

我々は門閥、金銭を条件とする婚姻恋愛に反対するが、恋愛とは無条件のものではない。まず我々は反動的政治思想を持つ者と恋愛をすべきではないし、もちろん民族の敵や階級の敵も対象外である。恋愛において、政治条件は重視されるべきものである。政治の様相を理解し、政治的質を考慮すべきである。もちろん、政治条件は第一条件であり、唯一の条件ではない。このほか、知識、健康、性格、容姿、趣味、年齢なども考慮すべき条件である。理想の伴侶とは政治思想上の一致がなければならず、生活上も調和しなければならない。¹⁸

しかし、政治要素はいったい工場労働者の婚姻に大きな影響を及ぼしたのか、張志永が言うように「人々は相手の政治条件や外面的な要素を重視し、物質的な面への要求は弱くなる」のか。このように政治的条件を優先条件にする恋愛観は、労働者の間にはひろく受け入れられていたわけではなかった。政治的栄光は、婚姻選択において項目のひとつには入っても、経済要素などの物質的条件が依然として、重要な要素であり続けた。

60年代の中ごろには、結婚の三条件は、百元(bai yuan)、技術員(ji shu yuan)、党員(dang yuan)の、三つの「yuan」でした。結婚には、腕時計、自動車、ミシンという「三転」が必要でした。我々が結婚した頃は、このように党員や技術員の給料が高かったのです。中等専門学校を卒業した技術員でも労働者よりも給料が低ければ、ダメなのです。¹⁹

党員、技術員の優越性は、依然として比較的の高い給料を基礎としていた。政治知識は経済的要素を満たした上で、付け加えられる評価項目であった。下記のトラクター工場の青年労働者の結婚相手探しの準備から、これが垣間見られる。

数人の青年男性は、結婚相手を探すために積極的に準備をし、金銭で女性を誘惑した。トラクター工場の一青年は、三年計画を立て、革靴、生地、腕時計、自動車を用意した。これを持って、相手探しを始め、さらに入団しようとして言うには、「みんなそろえてしまったので、あとは団章があれば完璧ですから」²⁰

¹⁷ 張志永『婚姻制度の伝統から現代への移行』中央社会科学出版社、2006年、175頁。

¹⁸ 程今吾「正しい恋愛観を確立する」丁玲等『青年の恋愛と結婚問題』1950年6月。

¹⁹ X氏談。

²⁰ 洛陽市档案馆「現在の結婚家庭分野に存在する問題に関する報告」1965年2月20日。

国家が強く政治的に唱導しても、人々は配偶者選択にあたって、まず経済的要素を考慮した。双方が同様に工場労働者で、一方の家庭経済の状況が比較的によければ、家計の負担も少なく、よい結婚相手を見つけることができた。党や労働模範といった荣誉は、同等の条件のもとでの付加価値に過ぎなかった。その原因は、まず党员と労働模範は極めて少数で、ほとんど求めることができなかった。次に、洛陽は新しい新興の工業都市で、資本家や知識人はほとんどおらず、政治成分を比較する意味はほとんどなく、なおかつ、工場労働者は農村農民と異なり、政治成分の区別はそれほど顕著ではなく、政治成分がよくない者の割合も、農村で占める割合ほどは多くなかった。加えて、工場では政治成分がよくない人物に対する糾弾が農村ほど苛烈ではなかった。このため、政治は工場の配偶者選択の中に思ったような影響力を持てなかったのである。1957年6月10日に洛陽市全範囲で始まった反右派闘争において、政治成分が婚姻に与える打撃もそれほど大きくはなく、当時は右派として攻撃された洛陽の工場は少なかった。文化大革命においても状況は同様であった。

三、結論

新中国の「婚姻法」の公布は、家庭や父母の婚姻の決定における地位を覆した。国家は自由恋愛を支持し、個人が家族の拘束から脱し、自発的に配偶者を選択するようしむけた。しかし、具体的な配偶者選択の基準については、国家も宣伝唱導、訓育を通して人々の心の中に一種の国家意識を打ち立て、一種の英雄的情緒的結合、つまりは社会主義・共産主義建設に対する偉大なる使命感を打ち立てようと試みた。婚姻は私的な事柄ではなく、国家的、社会的な問題だからである。労働者階級は祖国の工業化の偉大なる使命を負わされており、洛陽の工場労働者はすべからず社会主義の建設者であり、新中国の指導階級であるべきであった。このため、婚姻選択においても、革命的結婚観を樹立すべきであり、国家の大事と集団事業に貢献することを優先的な基準とし、職種や物質的要素などのブルジョアジーが考慮するような要素を勘案すべきではないとされた。

しかし、上記のフィールド調査から見てとれるのは、洛陽労働者の中で婚姻選択の基準はいまだ国家が唱導する路線に沿ってはいなかったということである。労働者の婚姻選択においては、まず考慮された要素は依然として、経済的要素であり、労働者の婚姻選択において、職業の選り好みがあり、これも経済的要素に由来していた。結婚選択において、政治的要素は、広い宣伝や強い唱導があっても、人々に決定的な影響を与える要素となることはなかった。労働者の結婚選択の出発点は、依然として個人と家庭にあり、国家は労働者の内面に革命的な結婚観を植え付けようとしたが、成功にはいたらなかった。労働者を決死の覚悟で社会主義建設に貢献させるために、国家は労働者の要求に対し、満足と妥協と与えるしかなかった。

(翻訳者注：脚注では中国語文献も名称等を和訳してある。原題等は中文論文を参照)

(翻訳：中山大将、巫観)